

もう一つの亀田文庫

「亀田文庫」と言うと、国語学者・故亀田次郎氏の旧蔵本を思い浮べる方が多いと思うが、当館には、もう一つの「亀田文庫」が存在している。

この文庫は、特定個人の蔵書を一括購入したのではなく、昭和一四年五月、実業家亀田候吉氏から国庫債券一〇七、五九〇円の寄贈を受け、それを基金として帝国図書館が随意に購入した資料を亀田文庫と称している。昭和一八年三月と一九年三月の二回に、合計九三タイトル七九三冊を受入れ、閲覧目録としては、『国立国会図書館支部上野図書館和漢図書書名目録・古書部 昭和一八年一月至二四年三月増加』に収載されており、請求記号が特一〇〇一〜特一〇〇四にあたるものがそれである。

文庫の内容は、特定主題を限定して購入したわけではなく、例えば、『源氏物語』古写本、『香道叢書』写本、『伊吹そふし』奈良絵本、また、現在当館貴重書となっているものを一部掲げると、『妙法蓮華経』春日版・鎌倉時代中期刊(WA3-8)、『涅槃経疏』古活字版(WA7-130)等々、さまざまである。

この基金の寄贈の理由は、『上野図書館八十年略史』に記事が

ある。亀田候吉氏の四男弘之介君は、学習院の学生で、帝国図書館を利用して勉強を続けてきたが、昭和一四年四月病死した。弘之介君が生前、親しんだ帝国図書館に感謝の意を遺し、候吉氏は愛児の遺言に基づき株式時価一〇七、〇〇〇余円を図書館入費として寄贈した。

昭和一四年当時の金の小売価格は一〇〇グラムが約四〇〇円だったから、約二七キログラムの金が購入出来る金額を、亀田氏は愛児の遺言として寄贈したわけである。亀田候吉氏は、東京・大森に明治一八年生れ、大正九年家督を相続、亀田(資)代表社員、大北産業(株)監査、所得税支払額四、九八七円と『人事興信録』昭和一四年版には記載されている。

なお亀田候吉氏は、帝国図書館のほか、日比谷図書館、学習院附属図書館に各々九七、八五〇円を寄贈したとの記事が『図書館雑誌』昭和一四年六月号に掲載されていた。

学習院大学は戦火に遭遇していないので記録が残っていると、思われ、稲村徹元氏を通じて調査依頼をしたところ、佐野真氏から回答をいただいた。それによると、学習院大学図書館は、九九、五九九円の寄贈を受け、亀田基金管理規程第一〜一六条を作成し、昭和一四年六月五日より運営を行い、図書購入費・製本費に当てたばかりではなく、基金の事業の一つとして、懸賞論文の募集も行った。そして、昭和一七年の入選者の一人が三島由紀夫であり、昭和五四年に学習院大学図書館で新たに発見された三島の論文原稿「王朝心理学小史」は、この懸賞論文募集に応じたものであった。